

まなびと学



もくじ

子どもが学ぶ問題解決的学習の充実のために

ー学習問題と「深める」場の検討ー 神代 明 2

多角的な思考を伸ばす観光授業のコンテンツ

ーハワイとの比較で観光地特性を学ぶ6年生ー 寺本 潔 6

実践紹介

[3年] 次期学習指導要領をどのように具体化し展開するか？

ー単元「身近な地域と市区町村の様子」ー 山下真一 12

[5年] 学びの自覚につなぐ社会科学習ノートの実践 近藤 真 16

子どもが学ぶ問題解決的学習の充実のために

ー学習問題と「深める」場の検討ー

九州女子大学 こうしろ あきら 神代 明

はじめに

小学校社会科においては、問題解決的学習を基本とする授業づくりが推進されている。

今回改訂された学習指導要領においては「主体的・対話的で深い学び」が提唱され、授業改善の重要な視点となっている。

これまで小学校社会科においては、問題解決的学習を基本として、さまざまな事象から観点を絞って丹念に見つめることから、問題を見出して、解決の方向性を考え、調査・追究を重ねながら、集めた事実を吟味し、比較・関連・総合させながら問題を解決し、社会への理解を深めることを目指してきている。

こうした問題解決的学習を通して、社会的なものの見方・考え方を深め、人々の営みを中心に思いや願いに迫り、思考力・判断力・表現力を育て社会への認識を確かにしていくことをねらいとしてきた。

今回示された「主体的・対話的で深い学び」は小学校社会科においては、これまで進められてきた問題解決的学習を踏まえながら授業の具体的な学習の姿として示したものと考えることができる。

1 子どもが学ぶ問題解決的学習の実現

問題解決的学習の姿としては、授業づくりにおいて次のような過程や考え方が一般的に基本として活用されている。

事象との出会い→問題把握（学習問題設定）→学習計画→調査・追究→まとめ

こうした過程の学びは、単元を構成していく際の目安として、大切なよりどころとなっている。

その考え方を基礎として、指導計画の構成を考えていくことは重要であると考え。しかし、問題解決的な学習は、学習問題をもとに予想し、調べ、わかったことを出し合ってあつてまとめていく形を追うだけの学習になってしまうと、ねらいとする思考力・判断力・表現力等の資質・能力は十分に育たないを考える。

上記の学習過程を基本としながらも、思考力・判断力・表現力等の能力の育成を旨とする「子どもが学ぶ問題解決的な学習」の充実が望まれる。その方略として2つの観点からの検討が必要であろうと考える。一点めは、子どもの問題意識の重視という点からの学習問題設定の課題である。二点めは、「深い学び」の実現からの調査・追究したことがらを踏まえた吟味・検討、「深い学び」の場のあり方である。

2 学習問題の設定について

社会科の学習問題においては、人間の営み、社会の仕組みや働きが見えてくるものが必要である。学習問題の類型としては、北俊夫氏によって次のようにまとめられている。⁽¹⁾

- ① 事実追究型（どのような…）
- ② 論理的追究型（なぜ…）
- ③ 意思決定型（どうすれば…）
- ④ 探検型（見に行こう、など）
- ⑤ 作業型（作ろう、まとめよう…）
- ⑥ 体験型（…しよう）

特に、学習問題の追究過程においては、事実追究型→論理的追究型→意思決定型へという過程を重視したい。学習問題は対象となる事象と出会い、そこから疑問や矛盾、わからないことなど問題意

識を醸成しながら単元を貫くものとして、単元の終末までを見通した、解決すべき問題として設定されることが一般的ではある。しかし、学習問題の中には複数の要素を含む問題が一つにまとめられ、設定されて追究していくように計画されていることも多くの実践にみられる。

学習問題は、確かに学級の協働で追究していく共通問題として問題解決の重要な位置を占めている。また、学習問題は、教師が提示する課題ではなく、子どもとともに作り追究・解決していく目標ともなるものである。子どもの興味・関心、問題意識、追究への意欲などから見つめ直してみると、本当に子どものものになっているのか、単元を貫く問題として、複数のまとめられた問題で意欲的な追究が可能なのか疑問が残るものもある。「学ばせたい内容」を勘案しながら、子どもの問題意識と教師の問いかけや提案をもとに、先の見通せないまま設定されていることも多い。

例えば、単元を貫く学習問題として次のようなものがある。4年生の単元「飲料水の確保」で、「水道の水は、どこからどうやって送られてくるのだろう。また、人々は水道の水をどのように使っているのだろう」という学習問題。この学習問題は2つの課題を含んでいる。解決のための追究の見通しがどう立てられるのか、どのような筋道で追究していくのかという疑問が残る。

人々は水道の水をどのように使っているのだろう



水道の水はどこからどのようにして送られてくるのだろう

複数の問題について単元を貫くという子どもの問題追究意識とは離れた形で設置するより、上記のように、学習問題を発展・連続していくものとして設定をすることも可能である。そうすることで子どもの学ぶ方向性が明確になり、追究への意欲も高まるものと考ええる。はじめは、「水道の水はどのように使われているか」という学習問題からスタートすることで十分成立しうる。

単元に一つ、しかも単元（小単元）を貫くこと

がいつも必要なのか、学習問題が遠い目標も加味されることで本当に子どもに「見通し」が持てる問題となっているのか、複数の要素を分離して、連続的に発展させていくことの方が、子どもの学びに沿ったものになるのではないかと考える。

問題を焦点化することで、追究・解決に向けての取り組みや追究課題も、より明確になる。一方で終末のまとめのあと、子どもの問題意識が薄いまま学習問題設定なしに子どもの学習を進展させていることはないのか、吟味が必要である。

単元の終末に「わたしたちにできる協力」や「これからの〇〇のあり方」などを、発展的に自分とのかかわりなどを取り入れて学習していく場合に、問題意識の醸成が不十分のまま課題提示されることもある。やはり、この段階でこれまでの事象追究をふり振り返りながら、社会に見られる課題性に気づかせ新たな学習問題として成立させていく中で、社会へのかかわり方を「多角的に」選択・判断していく学習へ変える必要があると考える。したがって、指導計画の中に、問題意識醸成への教師による働きかけなどとともに、発展的な学習問題として明確に位置づけていくことが望まれる。

内容によっては、単元の中で学習問題が解決し、さらに立ち止まって深めていく学習問題が生まれることもある。教師が意図的に働きかけ、問いかけて事実関係を深めていくことも必要となる。深めていく問題（「なぜ問題」）が成立することは、社会的事象の意味に迫る学習が成立する上で有効であろう。また、複数の学習問題が連続的に発展していく構成であってもよいのではないかと考えている。

単元においても子どもが「問い続ける」ことのできる問題解決的な学習を求めていくことも、より「主体的」な学習として成立させる上で重要な視点であると考ええる。

- ・小単元を貫く学習問題の成立による追究－「事実追究型」
- ・学習問題追究から深める学習問題へ展開－「事実追究型」から「論理的追究型」へ
- ・学習問題のまとめから発展し、次の学習問題

が成立し追究する展開－「事実追究型」から「論理的追究型」さらに「意思決定型」へ

・学習問題で複数連続的に追究して展開－「問題解決の連続」など

問題解決の過程を一つの形式に沿ったものとして問題解決的な過程を踏みながらも固定的に想定せずに、「内容」によって柔軟に取り上げ、子どもに「学ばせたいもの」を子どもが「学びたいもの」に転化し、より子どもの問題意識を高めながら展開しつつ、その展開過程と学習問題を想定していくことを考えていきたい。そのことによって、より主体的で、より多角的に社会的事象の特色や意味をとらえていく力動的な展開が期待できるのではないかと考える。

3 追究したことがらを吟味・検討し深めていく場面の設定

第2の検討として、吟味・検討の学習場面を考えてみたい。学習問題に基づいて調査課題を追究し、わかった事実を出し合い、話し合いながら学習問題の答えとしてまとめていくことはなされても、それを深く吟味・検討し、関係性や意味をとらえたり、新たな観点から、「社会的な見方・考え方」を生かして比較・関連したりしながら新たな関係性や特色、意味をとらえ、認識をより確かにしていくことが十分ではないという指摘もある。

「調べて発表しまとめる学習」から「考えを練り合い深めていく学習」への改善を目指したい。追究した事実をもとに新たな観点で考えを練り合い、深めていく学習の充実を通してこそ思考力・判断力・表現力などの資質・能力が高められるとともに、社会を見つめる目をより確かにしていくものとなると考える。

つまり、追究したことがらを検討・吟味することを重視し、そこから新たな事象提示や問いかけなどから「なぜ…」を問うことで、これまでとらえてきた事実を比較したり、関係づけたり、総合的にとらえなおしたりする「深める」場面を意図的に設定していくことも必要ではないかと考える。ここでは、追究過程における「深める場」として

の追究途中の新たな学習問題として「論理的追究型」の学習問題を成立させていくことを考えたい。

単元の学習問題（「どのように…だろう」）

追究・吟味

- ・1時間の学習課題（めあて）
- ・1時間の学習課題（めあて）
- ・1時間の学習課題（めあて）
- ・学習問題（「なぜ…だろう」）

まとめ

この場面は、問題把握－追究－吟味－深化－まとめという一連の過程に位置づけることもできる。

いずれにしても、集めた事実を学習問題に照らして検討・吟味する中で、「深めていく場面」の新たな設定を行い、ここで十分に思考力・判断力・表現力等を駆使して「考えを磨き合い」社会的事象の意味把握に迫りたい。

4 子どもの主体的な問題解決的学習における学習問題と学習過程の想定

これまで検討してきた2点の課題をもとに、学習過程と学習問題設定の考え方をモデル的に提示すると、次のように問題解決過程を考えていくことができる。

事象との出会い→問題把握(単元の中心的な学習問題-「どのような」)→学習計画→調査・追究→吟味・検討・深化(深化を目ざす学習問題-「なぜ」)→次の問題把握(新たな発展的な学習問題-「どうすれば」-「どうあれば」)→まとめ

やはり、問題解決的学習の基本を念頭に学習内容や子どもの実態に合わせて、子どもの問題意識の連続を視野に、学習過程や学習問題の表現や位置づけを十分に検討していく必要があると考える。そうした単元計画、学習問題、学習展開を構想する上で参考になる実践を右に紹介する。²⁾ 4学年単元「県内の特色ある地域」を、世界遺産登録前の2016年度に実践したものである。

【参考文献】

- 1) 北俊夫『学習問題づくりのマネジメント』文溪堂、2016年。
- 2) 福岡教育大学附属小倉小学校研究発表会要録「誘導の教育実践」2017年2月。

展開計画（総時間数12時間）【 】は配当時数。

	主な学習活動	誘導上の留意点	重視する評価の規準と観点
見 い だ す ・ 見 通 す	1 地図や資料を基に、宗像市について調べる。【1】	・宗像市の土地の様子、まちの動きをつかむことができるように、地形図、世界遺産登録を呼びかけるポスター、国内11件の世界遺産暫定リストの資料を提示する。	・「福岡県内の宗像市は、どのようなまちだろう。」と関心をもち、地図や資料を基に調べている。 (社会的事象への関心・意欲・態度)
	2 前時にわかったことや世界遺産登録推進室の加地さんの話を基に、調べたいことを話し合い、単元を設定する。【1】	・単元を通して世界遺産登録を目ざした宗像市の人々の取り組みに着目して、追究しようとする見通しをもつことができるように、世界遺産登録推進室の加地さんの話を読み取る活動を行う。	・「宗像市の人たちは、どのようにして世界遺産の登録を目ざしているのだろう。」と、問題を見いだし、調べる計画を立てている。 (社会的な思考・判断・表現)
	中心問題 宗像市の人たちは、どのようにして世界遺産の登録を目ざしているのだろう。		
挑 む ・ 立 ち 止 ま る	分析問題1 宗像・沖ノ島は、どのようなところだろう。		
	3 海の道むなかた館や神宝館を調査・見学して調べる。【3】 ・世界遺産登録推進室 加地さん ・宗像大社神宝館 福嶋さん	・宗像・沖ノ島の歴史的価値を具体的につかむことができるように、世界遺産登録推進室がある海の道むなかた館や、沖ノ島から発掘された8万点の国宝品が貯蔵されている神宝館を調査・見学する活動を仕組む。	・問題の解決に必要な情報を集めながら施設を見学したり、宗像・沖ノ島についてわからないことを質問したりしながら調べている。 (観察・資料活用 of 技能)
	4 調査・見学してわかったことを出し合い、まとめる。【2】	・「どのようなところだろう。」の問いに対して、認識を確かにすることができるように、「ここがすごいよ！宗像・沖ノ島」としてまとめる活動を設定する。	・宗像・沖ノ島関連遺産群について、歴史的価値などの特色を具体的につかんでいる。 (社会的事象についての知識・理解)
	分析問題2 宗像市の人たちは、どのような活動をしているのだろう。 問いの発展 〈なぜ、宗像市の人たちは、世界遺産登録活動をするのだろう。〉		
挑 む ・ 立 ち 止 ま る	5 宗像市の人々の取り組みを調べ、表現する。【2】 ・世界遺産登録推進室 加地さん ・宗像・沖ノ島市民の会会長 前田さん	・どのようにして世界遺産登録に向けて取り組んでいるか具体的につかむことができるように、資料を調べたり、加地さんや市民の会の前田会長の話を視聴したりする活動を行う。	・世界遺産登録に向けた宗像市の人々の具体的な活動について、資料を基に読み取っている。 (観察・資料活用 of 技能)
	6 宗像市の人々が世界遺産登録活動をするわけを考える。〈本時〉【1】	・宗像市の人々が、世界遺産登録活動をするわけについての認識を深めることができるように、「世界遺産登録後の宗像市」(観光客の増加、たすきをつなぐ人づくりなど)を視点に加えて考える活動を仕組む。	・「世界遺産登録後の宗像市」を視点に加え、宗像市の人々が世界遺産登録活動に取り組むわけを考え、表現している。 (社会的な思考・判断・表現)
生 か す ・ 広 げ る	分析問題3 「目ざせ世界遺産！宗像市～4B世界遺産登録推進会議～」をしよう。		
	7 宗像市の人々へ提案することを考え、「4B世界遺産登録推進会議」をする。【2】	・地域に対する誇りや愛情を抱く子どもを育てることができるように、世界遺産登録に向けた今後のまちづくりについて、加地さんや前田さんに提案する活動を仕組む。	・世界遺産登録に向けた今後の宗像市のまちづくりについて改善策を考え、加地さんたちに提案している。 (社会的事象への関心・意欲・態度)

(福岡教育大学附属小倉小学校 宮崎実践をもとに一部掲載)

多角的な思考を伸ばす観光授業のコンテンツ

ーハワイとの比較で観光地特性を学ぶ6年生ー

玉川大学 てらもと 寺本 きよし 潔

はじめに

日本におけるインバウンド（訪日外国人）は2,869万人に達した（2017年度）。その消費額は実に4兆4,000億円にも及ぶという（『日本経済新聞』2018年4月2日付記事）。今や観光振興は、人口減や高齢化になやむ自治体にとって、起死回生の施策と期待されている。観光振興を支えるのは人である。人を育てるのは教育である。しかし、教育界はこの変化に未だ対応しきれていない。観光の学びに賛同はできても、その方法や教材コンテンツが明らかでないこと、また、現在の教育課程に新たな内容を追加するすき間がないと認識されているためである。いくつかの自治体では観光の学習＝地域理解ととらえ、一種のふるさと学習やお国自慢学習にとどまっている。筆者の考える観光教育はこれではない。

自分の住む市や県に「愛着と誇り」を抱かせるだけにとどまらず、思考ツールと問題解決的な学習スタイルを取り入れ、地域の資源をいかに生か

していくのかを考える学び。また、観光客という他者の求めに応じた、観光地改善や新たな地域の魅力を生むための企画力を身につける学びを想定している。同時に、地図や統計処理、写真の読解などのさまざまな学習技能や外国語会話力も身につくことから一挙両得も期待できる。

本稿では、2018年2月に沖縄県那覇市立銘苅小学校6年学級で実施した出前授業をもとに、児童がみせた多角的な思考の変容について報告したい。出前授業は3時間連続で実施した（表1）。「対話的な学び」のため、学級を6または5人ずつの班で構成した。なお、第1時の授業内容に関しては、本誌のバックナンバー（『小学社会通信まなびと』2015年春号）にて紹介した手法のため、ここでは割愛する。本授業は、6年生の単元「日本とつながりの深い国々」に位置づけて行った。この場を借りて、快く受け入れていただいた当校の我謝勇前校長と6年生担任の先生方にお礼を申し上げます。

時間	テーマ	学習内容の概要
第1時	最新の沖縄県や那覇市の観光を考える	最新の沖縄県への観光入込客を把握し、寺本が開発した「観光地＋動詞＝観光の楽しみ方」の手法を用い、那覇市と近隣の観光地を楽しむ旅行プランについて地図を見ながら立案する。
第2時	ハワイと比べてみた沖縄の強みと弱みを考える	旅行パンフレットを使ってハワイ州の観光の魅力を学んだ後、寺本が改良した「SWOT分析表」を班で囲み、沖縄観光の強みと弱みについて考え合い、記入後、班別に発表する。
第3時	環境と調和した島のホテル建設を考える	寺本が作図した観光島（「バード島」）の白地図への記入を通して、利便性や自然環境と調和した規模別のホテル建設をテーマに、ペアや班で話し合い観光開発について考える。

▲表1. 出前授業（全3時間）の概要

沖縄県の観光面での強み（S）	沖縄県の観光面での弱み（W）
今、考えられる観光のチャンス（O）	沖縄県の観光の心配やおそれ（T）

▲表2. 各班の意見をまとめるSWOT分析表

1 ハワイ州（ホノルル市）と沖縄県（那覇市）の比較で思考する

今回の授業では「SWOT（スウォット）分析」という思考ツールを新たに開発し、教材コンテンツの一つとして用いた（表2）。SWOT分析とは経営学でしばしば用いられるツールであり、児童向けに筆者が改良を加えた。その一つは比較の対象を提示したことである。他地域との比較することで自県の特徴が明確化できると考え、対象地域をアメリカ合衆国ハワイ州と定めた。両者は観光の魅力や入込客数の面で近似しており、また、多くの児童が観光地としてのハワイについてある程度の知識をもっているためである。

① SWOT分析の効果

SWOTとは、強み(Strength)、弱み(Weakness)、機会 (Opportunity)、脅威 (Threat) の4つの軸から評価する手法のことで、企業の戦略立案などに用いられる。冒頭、手製によるホノルル市の観光地資料（B2判、写真1.）を提示したところ、児童の関心を引きつけることに成功した。ハワイ州と沖縄県の人口や気候、面積も併せて提示した結果、「入込客数や気候が似ている」「海がきれい

で暖かく、観光の魅力も同じだ」との前提をすばやく理解できた。

その後、「強み・弱み・チャンス・心配やおそれ」の4観点別に分析表を埋める班別の作業に取り組んでもらった。その結果、実に多くのコメントがふせん紙に記された。6年生3学期ではあるものの、小学生がSWOT分析を理解できたことは注目できる。

② ふせん紙の記述例

以下に、6年生による実際の記述を紹介する。

- ・強み（S）…「沖縄にしかない文化・伝統・自然・赤瓦など昔ながらのものがある」、「組踊などの伝統芸能がある」、「日本以外の中国や韓国などときよりが近い」
- ・弱み（W）…「冬は沖縄は雨が多くてさむくなる。気候が安定しない」、「オスプレイやヘリコプターの音がうるさい」、「面積が小さく、まわれるのがハワイより少なくなる」
- ・チャンス（O）…「オリンピックや世界ウチナーンチュ大会」、「方言」、「NAHAマラソンなどのイベント」
- ・心配やおそれ（T）…「観光客がじゅうたいにま

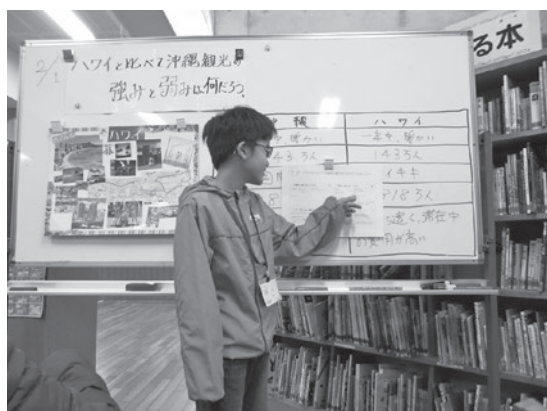
きこまれる」,「大雨が多くなって移動が大変になる」,「地震や津波」

このように、沖縄県の観光地特性を多角的な視点から分析できた。

以下に、この場面の発言のやりとりを再現する(Tは筆者、Cは児童)。



▲写真1. 児童に配布した、ハワイ州ホノルル市の観光資源のコラージュ(数種の旅行パンフレットを切り貼りして寺本が作成)



▲写真2. 班の代表がSWOT分析について発表する

T:「これは手作りしてきた、ホノルルという街の地図です。これを見ると、ダイヤモンドヘッドとか、ワイキキビーチがあります。ブルーのラインは緑のトロリーバスに乗って巡るコースです。ゴルフ場とかキラウエア火山などが、隣のハワイ島にあったりする。テレビコマーシャル「この木なんの木、気になる木」に登場する、巨大な木とかもあります。ウェディングとかフラダンスとか。おいしい食べ物もあるし、カメハメハ大王の銅像や人が口から火を噴くダンスもある。高層ホテルもある。(中略)これでハワイの楽しみ方がわかりましたね。ふせんを一人につき4枚配りました。S・W・O・Tのそれぞれを書いてください。例えば、Oの欄には、今、考えられる観光のチャンス。沖縄県を売り込む最大のチャンスを書くといいよ。

C: 2020年の東京オリンピック! いっぱいお客さんが来る。

T: 東京には来ても、沖縄にはお客さんは来ないんじゃないの?

C: そのときに沖縄ってすごいよって、空港とかに広告を貼って呼び込む。

T: なるほど。それはいい作戦だね。成田空港とかにね。沖縄もいいよ、乗り継いで来てねと。(中略)

T: 班長さんが号令をかけて、ふせんを紹介しながら表に貼って行って、あとで発表してもらいます。ハワイの方が面積は大きいですが、観光客数は同じだね。(10分後) さあ、発表できるくらいにまとめたかな。B班からどうぞ。

C (B班)：観光面での強みは、伝統工芸品が多いこと。郷土料理とか、昔ながらの家や建物があることが強みだと思います。そして弱みは、雨が多いのと、台風が来るのと、冬が寒かったり、ハワイと比べ山登りができないことだと思います。そして観光のチャンスは、東京オリンピックがあるから、そのときに沖縄をもっとアピールしたら、もっと観光客が来ると思います。最後に、心配やおそれは飛行機が止まったらどうするのかと。最近、沖縄の海が汚れてきているからマリンスポーツが減ってくるかもしれないということ、米軍のオスプレイが不時着したら観光客が不安じゃないのかなということです。

T：いきなりすごいアイデアや気づきがありましたね。

C (A班)：沖縄の観光面での強みは、伝統的な食文化や工芸品があること。弱みは、行く場所が少ないから一つの場所に人がとても多い。今考えられるチャンスは、オリンピックや世界のウチナーンチュ大会。観光の心配やおそれは、台風が夏のはじめに来やすいので飛行機に影響が出てしまうこと。

C (C班)：沖縄の観光での強みは、大陸からお客さんが来やすいということと、伝統文化や工芸品がたくさんあるということ。弱みは、気候が安定していない、海が少し汚れているところがある、米軍基地がある。オスプレイやヘリコプターの音がうるさいということがあって。今考えられる観光のチャンスは、東京オリンピックやワールドカップがあるので、いろんな国の人が日本や沖縄に来るので

アピールできる。心配やおそれは、台風や異常気象など。米軍の飛行機が不時着するかもしれないということ。

T：よくニュースでやっているよね。ありがとうございました。では次はD班です。

C (D班)：県の観光の強みは、中国、韓国が近くてその国の言葉をしゃべれる人が多いから、観光客が増えると思います。弱みは、冬は寒かったり夏は暑すぎたりして気候がばらばらだから、天気はあまりよくないと思います。今考える観光のチャンスは、東京オリンピックや昔の古民家や伝統工芸品とかが、はやってきていること。心配やおそれは、雨や台風が多くて、道が汚れたりして観光ができなくなったり、「ウチナータイム」で（沖縄の人は）時間にのんびりしたところがあるから心配です。

T：ウチナータイムと観光客は、どうつながるのかな。

C (D班)：ウチナータイムだと移動する時とか遅くなったら、渋滞に巻き込まれたら全然進まなくて観光ができなくなるので。

C (E班)：観光面での強みは、祭りが多く沖縄にしかない文化や伝統、自然などがあること。ハワイに比べていろいろあることです。観光面での弱みは、ハワイの方が土地は大きいので、そこに新しい観光スポットを作られたら、沖縄に来る人が減ってしまうということ、沖縄県は田舎だと思われる。今考えられるチャンスは、2020年に東京オリンピックがあり飛行機で沖縄に行って東京に戻ったりする、ちょっとこっちでゆっくりしようかなと

いう人もいると思うし、伝統工芸や方言なども見に来ようとしている人も増えているので観光のチャンスだと思いました。心配やおそれは、基地や米軍があって、オスプレイなどの問題があるのと、車の渋滞があることと、ハワイの方がいろんな国から飛行機が飛んで行きやすいということ、そうしたことが心配です（後略）。

以上のように、6年生なりに実に多角的な思考ができた。

2 観光島で環境と開発の調和を考える

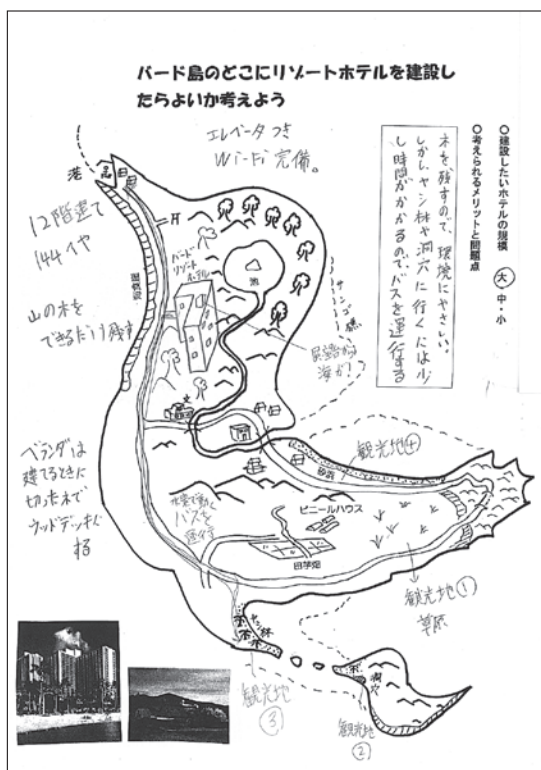
次に開発した新教材は地図ワークである（写真3.）。バード島と名づけたこの地図は、鳥の形をした亜熱帯の島の絵地図であり、学校や田芋畑、港や小さな集落、さんご礁や浜辺、断崖の連なる西側、砂州でつながる小島、シュロ科の樹木などが生える島として筆者が描いた。問いは、「バー



▲写真3. 地図ワークにホテル建設の場所を書き込む

ド島のどこにリゾートホテルを建設したらよいかを考えよう」である。

建設したいホテルの規模を「大・中・小」と選ばせ、考えられるメリットとデメリット（地図中ではそれぞれ「メ」「デ」と略して表記）も書くように指示した。児童が選んだ規模は大10人、中14人、小6人であった。砂浜近くに大規模ホテルを建築するを選んだ児童は、「メリット：ビーチの近くなので景色がとてもよい。デメリット：費用がかかる。港から遠い。」、池の西側に中規模



▲写真4. 地図ワークの作品例

のホテルを建設するとの考えの児童は「朝日や夕日が見られてきれいだし、夜は周りに電灯がないから星がキレイ。めずらしい生き物に出会える可能性あり。でも海に行くのに時間がかかる。」、田芋畑の西に建設案の小規模を選んだ児童は「メリット：近くに田芋畑やビニールハウスがあるから農作業とかを体験したりできる。デメリット：近くにある山をとりこわしてしまう可能性がある。農家の人に迷惑かもしれない。」などと、ホテル建設にともなう諸問題や効果について思いをめぐらすことができた。

こうした課題学習は、自然環境と観光開発との間で生じる諸問題を多角的に考えるトレーニングとなるだろう。

3 教科等横断的な学習で観光を扱う意義

主産業が観光業の地域では、単に「ふるさと学習」の一環だけでなく人材育成の観点からその教育に取り組んではいかがだろうか。筆者の肌感覚に過ぎないが、観光を学習材に扱くと児童の表情がちがう。観光というポジティブなテーマを、仲間と多角的に考え合う場面が楽しいようだ。別の小学校の出前授業では、観光地を英語のフレーズで案内できるように実践したことがあるが、そのときも楽しかった。観光教育は、ふるさと学習＋外国語会話＋ESD（持続可能な開発のための教育）における環境やまちづくり、防災などの要素が詰まっており、観光業と絡めればキャリア教育にも有効である。実社会の文脈と自己の生き方を関連づけて問い続ける、教科等横断的な学習が実現できる。

観光教育という聞き慣れないジャンルは、観光地理解といった地理的内容だけで成立するのではなく、歴史（文化財など）や観光産業（交通・宿泊業）、旅行プラン立案や観光地側のおもてなし企画、災害時の安全管理、ホスピタリティ（接遇）、外貨両替や為替の知識などにも必要になる。グローバル化がいつそう進展するこれからの社会にとって、「深い学び」を実現するためには、さまざまな授業場面で「伝え合い・学び合い」が生じるような指導の工夫が求められる。社会科では、社会的に意味ある題材をクローズアップしリアリティと切実感を醸し出すことが重要である。「社会を自分事へ引き寄せる」、「社会認識を深め、価値更新に導く」などの言葉でこれまでも重要視されてきた切り口である。農業や工業、ものづくりの精神を学び技術の伝承や価値に気づかせる産業観光の視点も学びがいがある。

さらに、5年生「情報と産業とのかかわり」や6年生「戦後の暮らしの向上と観光地の発展」、中学校社会科地理的分野「日本と世界の諸地域」などの単元に、観光内容を盛り込むことができる。観光の学びに関心をもっていただければ幸いである。

【参考文献】

寺本 潔 著『思考力が育つ地図&地球儀の活用』教育出版、2012年発行。

寺本 潔・吉田和義 編著『伝え合う力が育つ社会科授業』教育出版、2015年発行。

寺本 潔・澤 達大 編著『観光教育への招待－社会科から地域人材育成まで－』ミネルヴァ書房、2016年発行。

次期学習指導要領をどのように具体化し展開するか？

ー単元「身近な地域と市区町村の様子」ー

やましたしんいち
筑波大学附属小学校 山下 真一

はじめに

2020年度より次期学習指導要領が全面実施される。今回の学習指導要領改訂は、その構成や記述の方式が大きく変わった。社会科は学年間の教育内容の入れ替え、指導する順序の改変など、改訂の幅が大きい教科である。例えば、現行版教科書では指導時期が第4学年に位置づいている単元「地域の安全を守る働き」が、3年生に移行した。また、市や人々の生活の様子が変化してきたことを調べる単元「市の様子の移り変わり」が復活した。一方で、標準授業時数は70時間とこれまで通りである。

今年2月に冊子としての『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 社会編』（以下、『解説』）が書店の店頭に並んでからも、品薄状況が続いたように感じた。今回の改訂に多くの教員の関心が高まったためであろうか。

1 「身近な地域や市区町村の様子」の内容はどのように変わったか

今回の改訂によって、これまで第3・4学年の2学年分まとめて示されていた社会科の目標と内容が、学年別に示された。学習対象は、第3学年は子どもたちが生活する市区町村、第4学年は都道府県といった自治体である。また、学習指導要領の記述が「自分たちの住んでいる身近な地域や市（区、町、村）について」から「身近な地域や市区町村の様子について」に変わったことに注目したい。この記述の違いをどう読み解くかが、実際の学習指導の鍵になる。さらに、次の3点の変更点にも注目したい。a.「公共施設の場所と働

き」に「市役所など」が例示された。b.「内容の取扱い」において、この単元を「学年の導入で扱うこと」とし、『自分たちの市』に重点を置くよう配慮」すること。c.教科用図書「地図」（「地図帳」）を参照し、方位や地図記号について扱うこと、である。a.の「市役所」と具体的に示したのは、主権者教育や防災教育などとの関連が考えられる。市役所は、多くの公共施設を運営するだけでなく、災害時には避難所の開設や救援物資の配布などの対応拠点となる。これまで本単元では、子どもの発達段階をふまえ観察や調査などの体験活動を重視して、指導計画上、十分な配当時数を確保してきた。しかし、上記b.の指示は「観察・調査」よりも、「地図などの資料で調べ」の方に重点をおくことになる。さらに、上記c.により、地図帳の配布が第3学年次が変わる。『解説』では、「都道府県内全体から見た自分たちの市や隣接する市などの位置や位置関係について調べる」と、活用事例が示された。社会科以外でも、例えば第3学年から始まる英語活動において、地図帳を使って外国の位置や国名を確認させることなどが考えられる。

2 社会科のスタートとして

（1）生活科との接続を重視する

本単元の内容は、生活科とのつながりを重視することは現行と変わりはない。第2学年では、子どもの生活圏の広がりや空間認識の広がりから、学校周辺の探検をする。身近な商店街や公共施設に着目したり、お気に入りの場所や人とのかわりを通したりして気づきの質を高めていく。こう

した取り組みの積み重ねが、第3学年の社会科の学習を支えることになる。しかし、生活科では、あくまでも自分とのかかわりとして人や場所を学ぶため、地域の様子を地図に表す活動が主ではない。つまり、点（自分）と点（対象）を結んだ線として地域を学ぶことになる。それに対して、社会科では地域を面（広がり、場所による違いなど）としてとらえていく。そのために、子どもたちが実際に歩く体験によって地域の様子を調べ、空間認識を育みながら「社会的な見方や考え方」をとらえていくことが大切である。その方法として、絵地図や白地図にまとめさせる活動が展開されてきたのである。

しかし、今回の改訂では、「身近な地域」よりも「市の様子」の学習に重点を置くこととされた。これにより、探検した学校のまわりの様子を絵地図にまとめていくといった、地図を使った活動に、これまでのような時間数は確保しにくくなる。地図が読めない、書けないというような地図を使った活動が難しい子どもも多い。その一方で、教師が教え込もうとしても、子どもの地図に関する知識や技能が直ちに培われるわけではない。

やはり、学習指導要領改訂の主旨を踏まえつつも、生活科と社会科の関連を図るという意味において、学校のまわりを探検し絵地図をまとめる活動を、しっかりと取り上げていきたい。空間認識を育むうえで、実際に歩く経験や気づいたことを地図上に表現する活動は、欠かすことのできない学びである。仮にこの活動を行わないとすると、空間認識はどこで身に付けるのか、子どもが「社会科嫌い」にならないのか、など多くの疑問も指摘されるであろう。

ただし、時間数を圧縮して効果的に取り上げるようにしたい。学習指導要領における本単元のねらいは、「身近な地域や市の様子を捉え、場所による違いを考え、表現すること」である。「場所による違い」とは、複数の場所の様子を比べることによって浮かび上がり、認識されるものである。そのためには、最低限2つの異なる探検コースを歩かせ、比較させることが必要となる。地域によっては、複数の特色ある場所を1つのコース上にまとめた設定も考えられる。しかし、1回の探検で子どもが興味・関心をもって観察・記録できる内容には限度があり、また、子どもの体力や安全上の管理なども踏まえると、1つのコースでは3～4の見学先に絞るのが現実的であろう。いずれにせよ、主として捉えさせたいテーマをもとに見学先を配置したコース設定としたい。例えば、公共施設や古い建造物を見学させる「駅のまわりコース」や、地形や土地利用を観察させる「土地の高い所コース」などが考えられる。これらのコースを探検したのち、絵地図にまとめるとともに、コースごとの特色についてキーワードや短文で比べた表としてまとめるとよい。表にすることで、具体的に「場所による違い」が捉えやすくなるだろう。

（2）問題解決的学習を経験させる

社会科は問題解決的学習を柱とする教科であり、本単元において一通りの問題解決的学習を経験させたい。一方で、子どもに問題意識を持続させることや、学習問題をつくることの難しさがある。これまでの授業実践では、「市の様子はどのようになっているのだろうか」という表現の学習問題が多かった。市はどこに位置しているか、どのように広がっているか、どのような土地利用が見

られるかなどの問いである。この種の学習問題だと、予め教師が用意した資料を読み取り、その特色を白地図にまとめていく作業で終わってしまう。子ども自ら調べたいという問題意識をもつことや、何を調べればいいのかということを考え、予想することにはつながりにくい。

そこで本単元は、「身近な地域」学習を「場所による違い」を理解したところで一旦完結させ、自分たちの市も場所によって違うのではないかと、という連続的な問いをもたせて「市」学習につなげる構成としたい。これらの活動を行うことによって、子どもは主体的に問いをもち、学習問題をつくる姿勢を育ていけると考える。また、「場所による違い」という見方・考え方自体を問うことで、「深い学び」につなげられるのではないだろうか。これらの理由から、学習問題は「市の様子は、場所によってどのようにちがうのだろう」などとした。

(3) 地図学習を楽しく学ぶ

先にふれたように、第3学年から地図帳が配布され、本単元でも地図帳を活用して学ぶことになる。これまで以上に地図学習への関心が高まると考えられる。また、地図帳や地図の利便性や面白さについて実感できることが期待される。しかし、地図記号とそれが表すものの暗記になりやすい。これまで定番的に指導されてきた、地図記号の由来や意味とあわせて考えさせることで、子どもたちの興味や関心も高まるはずである。社会科嫌いを生み出さないためにも、「絵地図の学習」から「地図の学習」にスムーズに移行させるようにくふうしたい。例えば、共通の地図記号がないと描いた本人にしかわからない絵地図となってしまう

うこと、着色によって土地利用を区分するとわかりやすいことなど、地図記号や着色の有用性や必要感をもたせ、子どもが主体的にかかわれるようにしたい。

3 単元「身近な地域と市」の授業イメージ

最後に、具体的な授業イメージを提案する。

(1) まちの様子【配当7時間】

冒頭に「クラスの新しい友だちに自分の家の場所を紹介しよう」と発問したい。子どもたちは、生活科の学習をふり振り返りながら通学路に沿って自分の家までの絵地図を描いていく。そして、自分がよく行く場所や遊ぶ場所などを書き加えさせる。次に、「〇〇君の家は、わたしの家の近くだね」「こんな大きな公園があったんだ」などとお互いの家やよく行く場所を紹介し合う。友だちからの報告に胸が弾む。新しい友だちの家やよく行く場所の話の聞いていると、どこにあるのかを知りたくなってくる。

そこで、学校の屋上へ行き、まわりの風景をながめて、教えてもらった場所を探す。「あった！あそこだ」「ビルが多くて見えないよ」「本当にこの方向かな」などのつぶやきが広がっていく。たくさん疑問が生まれる。

教室に戻って、教師が作成した絵地図を見ながらこれから調べたいことを話し合う。子どもたちの中から「わたしたちのまちは、どんな様子なんだろう」という問いが生まれてくる。みんなで共有した問いを「学習問題」と呼ぶことを伝える。すると、子どもたちから「行ってみたい」「本当なのかな」という声が聞こえてくる。「行ってみ

よう！」と教師から子どもたちに投げかける。先に述べた通り、今回の学習では最低限2つのコース（場所）を探検し、それぞれの地域の違いを意識させることを大切にしたい。子どもたちは体験を通してわかったことを記録し、表にまとめていく。

探検後、教室の黒板に絵地図を貼り、探検したことを話し合う。どこに何があるかという発表を皮切りに、2つのコースそれぞれの特色について話し合っていく。そして、まちの様子は「場所によって違う」という抽象化させた言葉にまとめていく。

このように、問題解決的学習の流れに即して展開してみた。社会科のスタートとして生活科で学んだ内容や方法を生かしながら、楽しさを優先させるためである。生活科の学びの中で獲得した空間認識を社会科の学びの中で引き出し、たしかなものにしていく。具体的な体験をともなった学びであるからこそ、子どもたちは次の小単元へスムーズに移行できるだろう。

（2）市の様子【配当10時間】

市内のいくつかの特色ある場所の景観写真を見ながら、知っている場所、行ったことがある場所を発表する。これは、「身近な地域」の導入と同じである。子どもが発表した場所は、写真を見ながらその場所の地名や位置をたしかめていく。

市の様子について多くの情報が出た後で、都道府県における市の位置をたしかめていく。市の概要をとらえる場面である。市域の形状、市域の主な地形、市内の交通網などの地図を見ながら、市の特色に簡単にふれるようにしていく。これらの地図は、後の単元「市の様子の移り変わり」への

布石であり、再度活用する資料となるので、「社会的な見方・考え方」とあわせてきちんと指導しておくようにしたい。「市の様子は場所によってどのようにちがうのか」という学習問題をつくる。続いて、学習問題に対する答えを予想させ、学習計画を立てていく流れであるが、身近な地域で学んだ「社会的な見方・考え方」を意識させながら学習を進めていくようにする。土地利用（公園、森林、商業施設、住宅地など）、交通、人口分布、新しい街、古い建物や町並みなどを予想させる観点として、市の特色を取り上げていく。

次は、「調べる」段階として、公共施設、市役所の場所や働きを全員で学んだ後、他の場所について個別に選択をして学ぶ（複線型）ようにし、調べたことを簡単なパンフレットにまとめていく。そして、仕上がったパンフレットはクラスのみなどで紹介し合い、学習問題の答えである「市の様子は場所によって違う」ことをたしかめていく。

さらに、「自分たちのまちに観光客がたくさん来るのか」というような問いを設けて、市の特色やよさについて話し合いながら、地域に対する愛着を深めるようにする。その場合、再度、市の地図や写真をもとにふり返るようにし、自分の考えを再構成するようにしたい。

学びの自覚につなぐ社会科学習ノートの実践

慶應義塾横浜初等部 こんどう 近藤 まこと 真

1

なぜ今、社会科学習ノートなのか

「思考を深め、自らの学びを自覚することができる社会科授業」に向けて、実践を重ねている日々である。そうした授業を求める理由は、次の2点である。第一に、思考すなわち「社会的な見方・考え方」を深めることは、次期学習指導要領でも強調されたように、社会科本来の意義の一つだからである。第二に、自らの学びを自覚することは、子どもが自分の成長や変化を実感することであり、成長を実感する中で学び続ける意欲や学ぶ意味を創り出すことにつながると考えるからである。自分自身の学びや成長を自覚的にとらえ生き方を見つめていくことは、「人生100年時代」ともいわれる今後の予測困難な社会において、求められる資質・能力の中心ともいえるだろう。

そこで本稿では、特に子どもが自らの学びや成長を実感・自覚していく姿を実現するために、社会科学習ノート（以下、ノート）の活用を中心にすえた授業実践を提案したい。ノートを生かすことで、例えば次の3つのような姿が期待される。第一に、何をどのように書くか、子どもが自ら考えながら主体的に社会科学習ノートを創る姿。第二に、自分の考えを表現したり、考えの根拠となる資料を社会科学習ノートに準備したりしながら話し合って考える姿。第三に、自らの学びをふり返る中で新たな問いや考えを表現しようとする姿。これらの姿は、「主体的・対話的で深い学び」の視点とも重なるところが多い。また、子どもが学びを自覚し成長を実感していくには、学級の仲間と考え合った“学びのあしあと”や個人で考えた“学びのあしあと”が目に見えることが必要で

あり、この学びのあしあとを目に見えるようにする上でも、社会科学習ノートは効果的である。だからこそ今、社会科学習ノートの授業実践なのである。

2

社会科学習ノートの実践を充実させる3つのポイント

ノートの機能としては、①.練習帳の機能、②.備忘録的機能、③.整理的機能、④.探究的機能があげられるが、社会科授業では④.こそ大切にすべきである⁽¹⁾。これまでも私は、ノートを「とる」という受け身の姿ではなく、ノートを「つくる」という主体的な姿を求めてきた⁽²⁾。そこでこの「つくる」という立場から社会科学習ノートの実践を充実させていくために、次の3つの点を意識しながら実践研究に取り組んだ。

(ア)「ノートをつくる」という学習観を語り、

子どもと教師で共有する

「社会科学習ノートは自分の力でつくるもの。自分の学びのあしあとがたくさん詰まった、自分だけの教科書をつくっていこう。」と語ることを日々大切にしている。その具現化の手だてとして、今年度はノートを一冊の本に見立て、年間を通して創り上げていけるようにしてきた。社会科学習に取り組むにあたっての思いを「まえがき」に書き、学期終わりなどの節目には「コラム」として学びのふり返りを書き、学習が積み重なってきたところでページ番号を付けたり、「もくじ」を作成したりする。それにより子どもたちはノートを自分の考え、仲間との追究、事実や資料の詰まった「自分だけの世界に一つの教科書」として創り上げていくことができるのである。

時	本時の問い	学習活動の中心
1	自分たちの食べている米の産地を数えて、気づきを生み出そう。	作業的活動
2	産地の集計から問いを生み出し、学習計画を立てよう。	学習問題をつくる
3	クラスの問いを解決するための資料を調べよう。	調べ学習
4・5	米づくりのさかんな地域の特徴を明らかにしよう。	地理的見方による探究
6	米づくりの1年には、人のどんな仕事があるのだろう。	見学前の予想、視点づくり
7・8	大山千枚田（千葉県鴨川市）の見学・体験	体験学習
9	東北地方と大山千枚田を比べ、米づくりの1年をたしかめよう。	比較の考え方による探究
10	米づくりのために、どのようにくふうをしているのだろう。	人に視点をあてた探究
11	農業の技術の向上、人々の協力について詳しく調べよう。	時間的見方による探究
12	作られた米はどのようにわたしたちのもとへ届けられているのだろう。	関係的見方による探究
13	農家の人たちは、今、どのような問題をかかえているのだろう。	グラフの読み取り
14・15	課題を解決する「生き生きプラン」を考え、話し合おう。	話し合い活動

▲表1. 単元「米づくりの今、未来」の概要（全15時間）

（イ）視点を明確にしながら「ふり返し」を書く時間を確保する

学習をふり返るとき、子どもは事実や経験したことなどを総動員して個性的な表現へと向かう。しかし、「ふり返し」は軽く扱われてしまうことも多い。そこで、まずは「ふり返しこそ学び」と腰をすえ、毎時間ふり返しを書く時間を意識的に確保したい。そして、ふり返りの視点を「考えたこと」「気になっていること」「わからないこと」「友達から学んだこと」など「ふり返しシート」に落とし込み、その視点の中から子どもが自ら選んだり、時には教師が指定したりして、授業展開に応じたふり返しを書くことができるようにする。

（ウ）ノートづくり方を学べるようにする

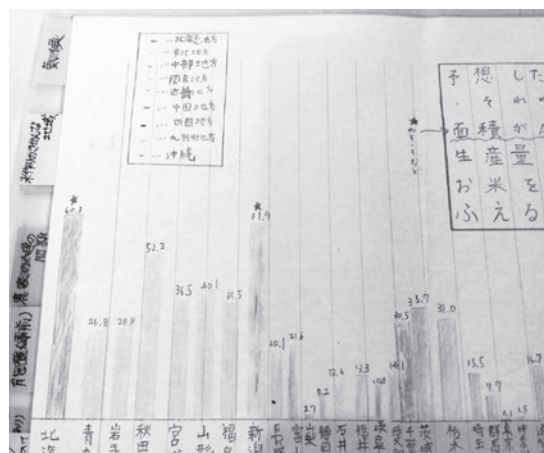
ノートづくり方は、主体性や学びの自覚につなげるためにも子どもが自分で決めることが原則であるが、放任的であってはならない。むしろ、細やかな支援を大切にしたい。例えば、板書は全て書き写すのではなく自分が必要だと思った部分を選択的に書くこと、授業で活用した資料ははみ出ないように貼ること、クラスの問いなど重要な部分は共通して書くことなど、一見あたりまえに思えるようなことも、継続的に指導していくことが大切である。

3 単元「米づくりの今、未来」の授業実践から

そこで次に、社会科学習ノートを中心にすえた授業における学びの姿を、具体的に紹介したい。表1.は本単元の概要である。

（ア）社会科学習ノートを通して、自ら学ぶ意味を見出そうとする子ども

ノートを「つくる」という学習観をもち始めた子どもたちは、自分から動き出していく。図1.は米の都道府県別生産量の分布図から、数値を棒グラフ化したA児のノートである。一つずつ数値



▲図1. 自ら資料を再構成するA児のノート

を読み取る必要があり、資料を再構成することはとても手数がかかる作業である。しかし自分のノートだからこそ、大変でも意欲的に取り組んでいくのである。また、学期終わりの共通の取り組みとして「1学期の社会科学習をふり返るコラムを書こう。」と投げかけた。その中に、次のように書いた子どもがいた。

コラム：1学期の社会科学をふり返って

1学期の初めての社会科学授業の時、私は社会科学って何するの？と思っていた。(実はずっと社会科学が何かよく分からなかった。)でも、この1学期の授業をやったおかげで、私は社会科学の学び方が分かった。社会科学は、問いを出して、予想をして、調べてみて、話し合いで自分の意見を言ったり人の意見を聞いて答えを出すものなのだと。自分の力で考えるのがとても大切なのも分かった。

この記述から、この子の社会科学習観の変容が見てとれるだろう。ノートに表現したからこそ、学び方も自覚化されているのである。

(イ)「ふり返りシート」を書くことで思考を深める子ども

授業終了時、3～5分のふり返りを書く時間を確保した。それにより、「社会的な見方・考え方」を働かせようとする思考の様子が明確に見えてくる。例えば、次の通りである。

・第1時のふり返り：数える作業から問いを生み出す子ども

統計をとってみて、佐賀や神奈川が産地のものもあったことに驚いた。なぜかという、北のほうが産地の米がものすごくたくさんあったからです。ぎゃくに、西や南の方は、ほとんどなかったからです。このあとは、お米を作っていない都道府県はあるのかや、日本ではどのくらいのお米の種類があるのかとか、どうして北の方は、お米の産地が多いのかなどの疑問も調べてみたい。

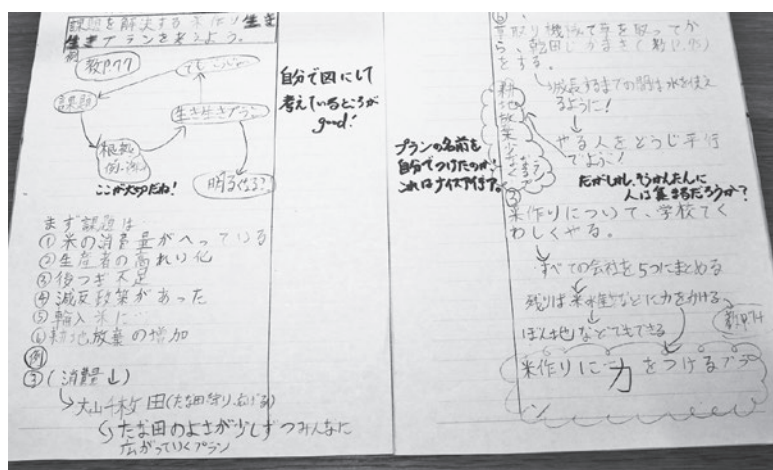
・第11時のふり返り：時間的な見方を働かせる子ども

今回の授業でぼくは農業技術の向上、人々の協力について詳しく調べようということでした。さらに調べた。ぼくが教科書のp72で見たことで発見したことは、昔は手作業で141時間米作りでかかったのだから、昔の人たちは大変だったんだなと思いました。しかも、今の機械化によって、141時間する1年の作業を24時間に、117時間も減ったことにぼくはびっくりしました。様々な機械の値段を今度ぼくは火曜日までに調べていきたいなと思っています。

図2.は、使用した「ふり返りシート」である⁽³⁾。このシート左側にふり返る視点を例示しており、子どもは視点を選んで記述する。もちろん、学習

自分で書こう (仲間の名前が出てくる自己評価を目指そう！)	先生から				
この時間で考えたこと・学んだこと・気になること こだったこと・わからないこと など、(目安5分以内) 「～が気になっています。」(次の学習につながる気づき) 「～のことを学んだ」「～ができるようになった」(自分の成長) 「○○さんの～という意見で～がわかった」(友だちから学んだこと) 「～はどうなのかなと思った」(学んで見えてきたこと)	もつと書こう！	いいね！ 理由を書いて	具体的に書こう	よい自己評価です。 伸びています！	学び方が伸びたね 次の時間ぜひ発表を！
ではない。しかし、それを農家の人は、 メリットへとかえていっていた。農家の 人は、自分たちの作業時間を短かく したり、費用をへらしたりして、いろいろと					

▲図2. ふり返りシートで学びを積み重ねる



▲図3. 自ら小見出しをつけるB児のノート

展開や学習活動と関連づけて、教師から視点を投げかけることも大切である。学習問題をつくることを意識した第1時の際には、「気になることを中心に書いてみよう。」と投げかけるようにした。このシートもノートに貼り付けていくことで、「学びのあしあと」となっていく。毎時間続けるうちに、書く文量も増える。その変化が行数という形で可視化されることで、「こんなに書けるようになったんだ!」と成長を実感することにもつながった。

(ウ) 社会科学習ノートのつくり方を自らくふうする子ども

資料はノートからはみ出ないように貼る、本時の問いは赤字で囲むなど、細やかな指導が大切である。その上で、子どもが自分でくふうすることが大切である。第14時はグループで話し合う時間が中心であったため、ほとんど板書をしていない。しかし、B児は「棚田のよさが少しずつみんなに広がっていくプラン」などの小見出しをつけ、自ら考えノートに書いていた(図3.)。こうした主体的なくふうを大いにほめて、価値づけていきたい。それが自らつくるノートづくりを加速させ、学びの自覚や成長の実感を育んでいくのである。

4

実践研究を引き継ぎ、さらに深めたい

以上、社会科学習ノートを中心にすえた授業実践を紹介してきた。社会科学習ノートの実践は、子どもが自らの学びを自覚すること、成長を実感することへとつながるため、ぜひとも必要である。「書くということは、主体的に考えて書くということである。(中略)1時間の学習のなかで、書くことなどをもっと行うべきである」⁽⁴⁾という実践知は、ICT化が進む今日においても大切にすべきである。これからも先達の実践に学びつつ、時代の変化に先んじていくような気概をもって実践や研究に取り組んでいきたい。

【註】

- (1) 小林宏己『「学習ノート」のつくり方活かし方』東洋館、1990年。
- (2) 拙稿「学習ノートをつくる力を育む」『月刊 社会科教育』明治図書、2013年。
- (3) 前田康裕(熊本大学教職大学院准教授)の実践を参考にさせていただいた。
- (4) 有田和正「ノート・レポートの指導と子どもの心理・認識」、『ノート・レポートの活用と授業』教育出版、1983年。



第16回

まもなく締め切り!!

地球となかよし メッセージ

作品募集 (2018年度)

「地球となかよし」という言葉から感じたり、考えたりしたことを、
写真 (またはイラスト) にメッセージをつけて表現してください。

応募者全員に
参加賞が
もらえるよ!

応募資格	小学生・中学生 (数名のグループ単位での応募も可)
応募期間	2018年7月1日～9月30日 詳細は「優秀作品展示室」とあわせてホームページをご覧ください。
作品 テーマ	①身のまわりの自然が壊されている状況を見て感じたことや、自然環境 や生き物を守るための取り組み ②さまざまな人との出会いを通して、友好の輪を広げた体験、異文化交 流、国際理解に関すること ③その他、「地球となかよし」という言葉から感じたり、考えたりしたこと

◎主催/教育出版 ◎協賛/日本環境教育学会
◎後援/環境省、日本環境協会、全国小中学校環境教育研究会、毎日新聞社、毎日小学生新聞
*協賛・後援団体は昨年実績で、継続申請中です。

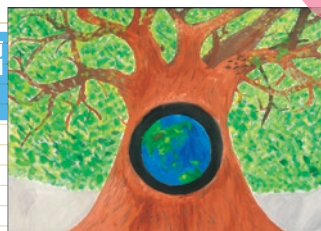
応募の決まりなど詳しくはホームページを見てね
<https://www.kyoiku-shuppan.co.jp/>

教育出版

「地球となかよし」事務局

TEL 03-3238-6862 FAX 03-3238-6887
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-10

前回
入選作品



地きゅうをまもっている木

この絵は、人間が作り出したわるい空気を、木がきれいな空気にかえているところをそうぞうしてかきました。
大きな木の中に、うちゅうがあり、そして、わたしたちがずむ地きゅうがあります。
わるい空気は、水を多くふくませてかきました。

小学社会通信 まなびと [2018年 秋号] 2018年8月31日 発行

編集: 教育出版株式会社編集局
印刷: 大日本印刷株式会社

発行: 教育出版株式会社 代表者: 伊東千尋

発行所: 教育出版株式会社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-10 電話 03-3238-6864 (内容について)
URL <https://www.kyoiku-shuppan.co.jp> 03-3238-6901 (配送について)



なかよし宣言

わたしたちをとりまく自然や社会は、科学技術の進展や国際化、情報化、高齢化などによって、今、大きく変わろうとしています。このような社会の変化の中で、人間や地球上のあらゆる命がのびのびと生きていくためには、人や自然を大切にしながら、共に生きていこうとする優しく大きな心をもつことが求められています。

わたしたちは、この理念を「地球となかよし」というコンセプトワードに込め、社会のさまざまな場面で人間の成長に貢献していきます。

北海道支社 〒060-0003 札幌市中央区北三条西3-1-44 ヒューリック札幌ビル 6F
TEL: 011-231-3445 FAX: 011-231-3509
函館営業所 〒040-0011 函館市本町6-7 函館第一ビルディング3F
TEL: 0138-51-0886 FAX: 0138-31-0198
東北支社 〒980-0014 仙台市青葉区本町1-14-18 ライオンズプラザ本町ビル 7F
TEL: 022-227-0391 FAX: 022-227-0395
中部支社 〒460-0011 名古屋市中区大須4-10-40 カジウラテックスビル 5F
TEL: 052-262-0821 FAX: 052-262-0825
関西支社 〒541-0056 大阪市中央区久太郎町1-6-27 ヨシカワビル 7F
TEL: 06-6261-9221 FAX: 06-6261-9401
中国支社 〒730-0051 広島市中区大手町3-7-2 あいおいニッセイ同和損保広島大手町ビル 5F
TEL: 082-249-6033 FAX: 082-249-6040
四国支社 〒790-0004 松山市大街道3-6-1 岡崎産業ビル 5F
TEL: 089-943-7193 FAX: 089-943-7134
九州支社 〒812-0007 福岡市博多区東比恵2-11-30 クレセント東福岡 E室
TEL: 092-433-5100 FAX: 092-433-5140
沖縄営業所 〒901-0155 那覇市金城3-8-9 一粒ビル 3F
TEL: 098-859-1411 FAX: 098-859-1411

本資料は、文部科学省による「教科書採択の公正確保について」に基づき、一般社団法人教科書協会が定めた「教科書発行者行動規範」のっとり、配付を許可されているものです。